

『叡山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』

前 川 健 一

一 問題の所在

円珍の著した『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（以下、行業記）は、「撮故僧仁忠記文」（伝全五附録五五頁）したものである。この仁忠の「記文」とは、円珍の蔵書目録『山王院蔵』に「比叡大師伝」とあるものと考えられる。⁽¹⁾問題は、これが現存の一乗忠撰『叡山大師伝』（以下、大師伝）と同一か否かという点である。「一乗忠」が仁忠であれば、「故僧仁忠記文」は一乗忠撰『大師伝』のことと考えるのが普通であろうし、実際、従来はそのように考えられてきた。しかし、近年では、一乗忠は真忠であり、「故僧仁忠記文」と現行の一乗忠撰『大師伝』とは別のものであると論じられている。⁽²⁾しかし、これに対しては、『大師伝』に現れる人名とその他の資料との比較から、仁忠とは玄慧のことであり、一乗忠が仁忠である可能性が高いことが指摘されている。⁽³⁾

そこで、改めて「故僧仁忠記文」に基づく『行業記』と現

行の『大師伝』とを比較し、「故僧仁忠記文」と『大師伝』との関係を考えてみたい。⁽⁴⁾

二 『行業記』と『大師伝』の比較

『行業記』と『大師伝』を比較すると、最も大きく異なるのは、次章で示すように在唐中の事跡である。その他、全般的な特徴としては、以下のような点がある。

(一)、(在唐中の記事を除けば) 文言の繁簡はあるにせよ、事跡の内容はほぼ一致している。

(二)、ただし、『行業記』で完全に省略されている記事が幾つかある。⁽⁵⁾

(三)、『大師伝』で詳細に引用される公文書が、『行業記』では省略されている。

(四)、一方、最澄が比叡山入山にあたって記した願文や、臨終の際の遺戒などは省略無しに引用されている。

(五)、部分的に『行業記』の方が詳細な箇所がある。⁽⁶⁾

(六)、固有名詞の表記が異なる。⁽⁷⁾

(七)、『叡山大師伝』では最澄のことを「大師」と称するが、『行業記』ではそのような例がない。⁽⁸⁾

三 在唐中記事の検討

最澄在唐時の両書の記述を対照すると、以下のようになる

『大師伝』は伝全五附録一六頁～一九頁。『行業記』は同上五一頁～五二頁。

(大師伝) 延暦廿二年、閏十月廿三日、於太宰府竈門山寺、為四船平達、敬造檀像藥師仏四軀、高六尺余、其名号無勝淨土善名称吉祥王如来。又講說法華・涅槃・華嚴・金光明等大乗經、各各數返。具如願文。

(行業記) 〈記載無し〉

(大師伝) 廿三年秋七月、上第二船。直指西方。於滄海中、卒起黑風、侵船異常。諸人懷悲、無有恃生。於是、和上發種種願、起大悲心。所持舍利、施龍王。忽息惡風、始扇順風。未久著岸。名為明州鄞県。此台州近境也。天感人欲。泊船有便。聖風遠扇、往還無滯。

(行業記) 廿三年秋七月、上第二船。達唐明州。時国号貞元廿年也。

(大師伝) 大唐貞元廿年九月上旬。船頭判官等上京。但和尚別向天台山。

(行業記) 船頭領徒入京。和上独向台山。山在台州。与明州近。

『叡山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』(前川)

(大師伝) 即明州牒送台州。其牒詞云、「勾当軍將劉承規狀備」得日本国僧最澄状「欲往天台巡礼疾病。漸可今月十五日發。謹具如前」者、使君判付司給公驗并下路次県給船及担送過」者、准判者謹牒。」即受牒上道。

(行業記) 〈記載無し〉

(大師伝) 同月下旬到台州。

(行業記) 不日而達。

(大師伝) 天台山国清寺衆僧、通來慰勞。歸寺歎曰、「昔聞西域騰蘭、馱梵夾於白馬、降邪道於南郊。今見東域闍梨、渡妙法於滄波、拯蒼生於水陸。」各竭礼敬。頂戴隨喜。

(行業記) 〈記載無し〉

(大師伝) 時台州刺史陸淳、延天台山修禪寺座主僧道邃、於台州龍興寺、闡揚天台法門摩訶止觀等。

(行業記) 遇台州刺史陸淳、請天台傳教大德道邃和尚於州下龍興寺淨土院講止觀。

(大師伝) 即便刺史見求法志隨喜云、「弘道在人。人能持道。我道興隆今當時矣。」則令邃座主勾当写天台法門。纔書写已。卷数如別。邃和上、親開心要、咸決義理。如瀉瓶水。似得宝珠矣。

(行業記) 〈記載無し〉

(大師伝) 又於邃和上所、為伝三学之道、願求三聚之戒。即邃和上、照察丹誠、莊嚴道場、奉請諸仏、授与菩薩三聚大戒。凡在所受所聞、憶持不漏失。将来伝受、猶尚無遺。

『叡山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（前川）

八八

（行業記）受円教菩薩三聚淨戒。和尚旋与本国。勾当抄写天台大師所傳教文二百四十卷。

（大師伝）又同時有付法弘隴寺僧行滿座主。見求法深心、自相語言、「昔聞、智者大師、告諸弟子等、『吾滅後二百歲、始於東國、興隆我法。』聖語不朽。今遇此人矣。我所披閱法門、捨与日本閻梨。將去海東。当紹伝灯。」凡法華疏・涅槃疏・釈籤・止観并記等八十二卷。

（行業記）次登台嶺。於禪林寺、遇伝教大德僧行滿。蒙捨与数本法文等。

（大師伝）自手書云、「比丘僧行滿、稽首天台大師。行滿幸蒙嘉運、得遇遺風。早年出家、誓学仏法。遂於毘陵、大曆年中、得值荊溪先師。伝灯訓物、不揆暗拙、添陪末席。荏苒之間、已經数載。再於妙楽、聴聞涅槃。教是終窮、堪為宿種。先師言帰仏隴。已送余生。学徒雨散。如犢失母。纔到銀峰、奄徒灰滅。父去留楽。狂子何依。且行滿掃灑龕墳、修持院宇。經今廿余祀、諸無可成。忽逢日本国求法供奉大德最澄。法師云、『親辭^{（開字）}聖沢、面奉^{（開字）}春宮、求妙法於天台、学一心於銀地。』不憚勞苦、遠涉滄波。忽夕朝聞。亡身為法。觀茲盛事、亦何異求半偈於雪山、訪道場於知識。且滿傾以法財、捨以法宝。百金之寄、其在茲乎。願得大師以本念力、慈光遠照、早達鄉閭、弘我教門、報我嚴訓。生生世世、仏種不斷。法門眷属、同一国土、成就菩提、龍華三會、共登初首。」

（行業記）（記載無し）

（大師伝）（記載無し）

（行業記）更於山下国清寺、屈十大德、与求法訳語沙門義真、受

声聞戒。事載於別。

（大師伝）又大唐貞元廿一年四月上旬、来到船所。更為求真言、向於越府龍興寺。幸得值遇泰岳靈巖山寺鎮国道場大德内供奉沙門順曉。曉感信心之願、灌頂伝受。三部三昧耶図樣契印法文道具等、目錄如別。

（行業記）廿一年四月從台州、迴至明州。請得公驗。至越府龍興寺。遇善無畏三藏第三代伝法弟子内供奉順曉阿闍梨。稟承持念法教、抄得真言天台教文一百一十五卷。前後都得三百五十五卷矣。

（大師伝）順曉闍梨付法書云、「大唐国開元朝、大三藏婆羅門国王子、法号善無畏、從仏国大那蘭陀寺、伝大法輪、至大唐国、転付囑伝法弟子僧義林。亦是国師大阿闍梨、一百三歳、今在新羅国、伝法、転大法輪。又付大唐弟子僧順曉。是鎮国道場大德阿闍梨。又付日本国供奉大德弟子僧最澄、転大法輪。僧最澄是第四付囑伝授。唐貞元廿一年四月十九日書記。令仏法永永不絶。阿闍梨沙門順曉録付最澄。」

（行業記）（記載無し）

（大師伝）（記載無し）

（行業記）五月上旬、却至明州、載第二船。

（大師伝）五月中旬、上第一船。蒙三宝護念・神祇冥護、海中無恙、著長門国。

（行業記）（記載無し）

両者を比較して、最も大きな違いは、国清寺での義真の受

戒の記事の挿入であろう。⁽⁹⁾これは、円珍が師匠である義真の事跡を挿入したものと解されている。⁽¹⁰⁾しかし、もしそうであるなら、義真が受けた戒を「声聞戒」と称しているのは不審である。もちろん、帰国後、義真に対して治部省から発給された公驗（「賜向唐求法訳語僧義真公驗」、『顯戒論縁起』所収）には「於台州国清寺、屈大德、受声聞具足戒」とあり、実際に具足戒を受けたことは明らかなので、その戒を「声聞戒」と呼ぶことには何の問題もないようであるが、円珍が『行業記』を著した段階では、天台宗では円頓戒（内容としては梵網戒）によって比丘と成ることが定着しており、そのような状況で自らの師匠である義真が「声聞戒」を受けたと書くことには、あまり合理性がないように思われる。ちなみに、最澄が具足戒を受けたことに関しては「二十進具矣」（『叡山大師伝』は「年二十進具也」とあるので、義真についても同様の表現で良いはずである。もともと、直前の「受円教菩薩三聚淨戒」とあるのとの対比で「声聞戒」と書いたと解することも出来るが、この菩薩戒については義真も受けているので、もし円珍が義真の事跡を敢えて加筆したとするなら、こちらについても書いていないとおかしいように思われる。⁽¹⁴⁾

また、もう一つ目立った違いとして、唐からの帰国についての記載がある。『大師伝』は「五月中旬。上第一船」とあるのに対して、『行業記』では「五月上旬。却至明州。載第

『叡山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（前川）

二船」とある。最澄は『顯戒論』の中で「大使処分、乗第一船」（伝全一・三五）と述べ、遣唐大使・藤原葛野麻呂の指示で第一船に乗ったことが明らかなので、事実としては『大師伝』が正しい。また、第一船・第二船とも帰国の途については五月十八日なので、これも『大師伝』の記述が正しい。しかし、少なくとも越州での受法・經典収集を終えた後、帰国船の停泊していた明州に戻ったことは確実であり、貞元二十一年五月十三日に越州で収集した經典の目録（「越州録」）を作成し、十五日に明州刺史・鄭審則から印可を与えられているので、「五月上旬、却至明州」という『行業記』の記述には妥当性がある。⁽¹⁶⁾「載第二船」というのは、明州に戻った段階では、往路と同様、第二船に乗ることになっていたということではなからうか。

このように考えるなら、『大師伝』と『行業記』の記述は補い合っていることになる。⁽¹⁷⁾ここから考えられる一つの仮説は、円珍が見た「故僧仁忠記文」には、現行『大師伝』と『行業記』を合わせたような文章が記されていたのではないであろうか、ということである。そのような「故僧仁忠記文」をもとに、それぞれの関心から撮要が行われて、現行『大師伝』と『行業記』が成立したのではないであろうか。いささか突飛に見えるかも知れないが、そのように考えると、現行『大師伝』と『行業記』との差異の幾つかについて、単に円

『叡山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（前川）

九〇

珍が付加したと考えるよりも、説得力のある説明ができる。たとえば、以下の箇所を見ていただきたい。

（大師伝） 以大同五年正月。於宮中金光明会。始天台宗年分八人共出家也。年年度者。相続不絶。

（行業記） 大同五年正月。宮中金光明会。始度天台年分八人。光定光善光忠等是也。

単純に比較すると、『行業記』の文は『大師伝』の文を省略し、具体的に度者の名を挙げたもののように見える。しかし、挙げられた名を見ると、光定はよいとしても、光善は得度後に法相宗に移っている⁽¹⁸⁾、光忠は弘仁六年夏に亡くな⁽¹⁹⁾っており、わざわざ名を挙げるには値しないように思われる。これは、円珍が補ったのではなく、「故僧仁忠記文」をそのまま写したと考えた方が合理的である。

四 結び

本稿では、『行業記』と『大師伝』の比較を通して、『行業記』の見た「故僧仁忠記文」が、『行業記』の記述と『大師伝』の記述の両方を成り立たせるような記載内容を有していたのではないか、との仮説を導いた。これは逆に言えば、現行『大師伝』は仁忠が記したままのものではなく、後人の手が入っているということでもある。資料が限られているので、決定的ではないことは重々承知であるが、一乗忠を仁忠と考

える立場に立つと、このように考えざるを得ないと思う。

- 1 佐伯有清『伝教大師伝の研究』（一九九二年、吉川弘文館）三九頁。
- 2 佐伯前掲書五三～五四頁。
- 3 前川健一「最澄伝の再検討」、『地球文明と宗教』（二〇一三年、公益財団法人東洋哲学研究所）。
- 4 従来の研究として、多門亮深「祖師行業記の誤謬」（『台山余輝』第五輯、一九三七年）、佐伯前掲書四八～五三頁参照。多門論文の評価については、佐伯前掲書四四～四八頁参照。佐伯前掲書での検討は概略的なものに留まっているとともに、『叡山大師伝』を真忠の作とする立場からのものである。
- 5 『行業記』に見えないのは、神宮禅院で舍利を得た記事（伝全五附録二～三頁）、内供奉寿興が最澄の願文を見て交友を結んだ記事（同上五頁）、延暦二十一年十一月に一乗止観院に南都の十大徳を招いた記事（同上七～八頁）、延暦二十二年閏十月二十三日に太宰府竈門山寺で旅の無事を祈った記事（同上六頁）、大同五年春に一乗止観院で三部経長講を始めた記事（同上二七頁）、弘仁五年正月に殿上で問答を行った記事（同上二九～三〇頁）など。また、『大師伝』では弘仁十三年六月四日の最澄の入滅以後、同十四年六月までの記事があるが、『行業記』では最澄の入滅で筆を止めている。
- 6 たとえば、後述の在唐中の記事では、最澄が得た經典の巻数などは『行業記』の方が詳細である。
- 7 たとえば、『大師伝』の「上野国浄土院」（伝全五附録三一頁）に対して、『行業記』は「上野緑野寺」（同上五三頁）とする。
- 8 たとえば、『大師伝』「大師諱最澄」（伝全五附録一頁）に対

して『行業記』『祖師諱最澄』（同上四九頁）。

9 なお、注四でも触れたように、延暦二十二年閏十月二十三日に太宰府竈門山寺で旅の無事を祈ったという記事が『行業記』にはないが、これに対応する（弘仁）五年春為果宿願、向太宰府」という文が『行業記』の後段にあるので、延暦二十二年閏十月二十三日の記事は「故僧仁忠記文」にあったが、円珍の判断で省略されたと思われる。

10 佐伯前掲書五二―五三頁。

11 「大唐受具足戒僧義真戒牒」（『顯戒論縁起』所収）。

12 『行業記』末尾の日付によれば、「元慶五年七月廿日」。

13 「伝菩薩戒道遂和上書」（『顯戒論縁起』所収）。

14 なお、余論であるが、義真の受戒に関して、最澄が唐に持参した「屈十大徳疏十卷」（『大唐明州向台州天台山牒』、『顯戒論縁起』所収）との関連に注意を喚起しておきたい。この「疏」に関しては、延暦二十二年に南都の十大徳を招請した法会と関連づける見方があるが、恐らくはそうではなく、義真の受戒のため十人の僧侶を三師七証として招請する依頼状と考えるべきであろう。最澄は、この「疏」と一緒に「水精念珠十貫」を持参しているが、これは三師七証となる僧侶への布施と考えられる。もとより最澄個人がこのようなものを準備できるはずもなく、最澄に法華経などの天台山納入を依頼した皇太子（後の平城天皇）などの配慮であろう。

15 『日本後紀』延暦二十四年六月乙巳条。

16 『内証相承弘法血脈譜』には、貞元二十一年五月五日に明州檀那行者・江秘および明州開元寺西廂法華院・靈光から伝授されているが、『血脈譜』には著者性の上で問題があることが指摘されているので、参考に留めておく。福井康順「内証相

承弘法血脈譜」新義」・同「内証相承弘法血脈譜」承前」、『福井康順著作集第五巻 日本天台の諸研究』（一九九〇年、法蔵館）。

17 このような観点からすると、貞元二十一年四月の箇所も記述が補い合っている。『大師伝』で言う「船所」は、帰国船の停泊している明州のことであるから、「来船所」と「従台州、廻至明州」は実質上、同じことを表現している。明州に戻ったのは、越州の龍興寺に行く許可を得るためであった（『大唐明州向越府牒』、『顯戒論縁起』所収）ので、『行業記』の言うところ「請得公驗」である。一方、越州に向かったのは、未入手の經典（特に密教典籍）などを求めるためであったから、『観山大師伝』の言うとおり「更為求真言」である。

18 「僧光善（法相宗相奪）不知師主 西大寺」（『天台法華宗年分得度学生名帳』、伝全一・二五二頁）。

19 「僧光忠（死去。弘仁六年）」（同上）。

（キーワード） 最澄、円珍、仁忠、一乗忠

（公益財団法人東洋哲学研究所研究員・博士（文学））

『観山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（前 川）